
リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

【NZコード】

N1653Y

【作者名】

キセル

【あらすじ】

自殺した者は天国にも地獄にも行けない。

その行き着く先となる天獄という檻に捕われた性別も年齢も様々な14人の自殺者達。

各自殺者達に己の自殺に仕様した道具が配分された中、彼等14人は強制的な共同生活を強いられる。

共同生活はルールに反しない限り、何をしても自由であり、最後の一人となつた者は望みを叶えた上でこの天獄から解放される。

”生き返り”を賭けたり・ライフゲームが今始まる。

『共同生活のルール』（前書き）

『小説閲覧前の注意点』

- ・この小説には残酷な表現や性的にキツイ表現があります。
- ・御都合展開はなるべく無いようにしますが出てくるかも知れません。
- ・作者が未熟なのでルールや設定に矛盾や穴が出てくる可能性もあります。
- ・作者が未熟なので誤字、脱字が目立つかもしれませんが適度に脳内補完して下さい。
- ・注意点がまた増えるかもしれません。

以上の事がオッケーといつの方のみ、読み進めて下さい。

『共同生活のルール』

うけけけつ！は～い、全知全能たる神様から貰つた命をわざわざ自分で捨てたクズの皆々様注目うツ！！

よつ～そ…てんぐへへ…！

最初に言つておくけど天国じゃないよ天獄さ。

君達は知つてるかい、自殺した人間つてのは天国にも地獄にも行けないんだよ。

だからここは天国でも地獄でも無い、天獄。

だから僕は天の使いである天使でも地獄の鬼でも無い、天鬼でーす。

うけけけつ！なのでここには天国のよつな心地好い暮らしも地獄のよつな苦行も一切存在致しません、良かつたね、自殺なんて一番の大罪とも言われてるのに。

まあ言葉を変えればこの空間には何も無いって事だけだね。

君達14人にはそんなこの空間での共同生活を楽しんで貰おうと思います。

君達は既に死んじゃつてるので食事は必要ありません、共同生活の時間は無制限です。

一応共同生活でのルールがあるので良く覚えて下さい。

壹・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、したがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です。

弐・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。

参・この空間に昼や夜、つまり時間の概念はありません、だから共同生活は時間無制限です。

氏・食事は必要ありません、飢えで倒れる事も、もちろん死ぬ事もありませんが睡眠は必要です、睡眠は各自、自分の部屋と独房以外では禁止です。

呉・天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止です。

録・時折天鬼ちゃんマジ天鬼からのプレゼントがあります、どう使うかは自由です。

七・不純異性行為、つまり性行為は両者の合意、レイプのどちらも禁じます、合意の場合はどちらも、レイプの場合は加害者が処罰の対象です、性行為の基準は天鬼ちゃん基準です。

エ・独房の使用は自由ですが鍵は共通の物として必ず指定の場所に戻して下さい、個人による管理は禁止します。

Q・この空間を調べる事は自由ですが決められた立入禁止の場所に入るのは禁止です。

獣・共同生活の中で殺された場合、それは成仮扱いとなります。

銃市・全員成仮し、最後の一人となつた者は願い事を一つ叶えた上で生き返る事が出来ます。

。 12・共同生活をする上でルールは絶対であります。

十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仮して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。

じゅりょん・《

》

うけけっ！―では、ルールをしっかりと守って楽しむ共同生活を送りましょう！

『共同生活のルール』（後書き）

と、いう訳で始まりました、リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～、作者のキセルです。

ヴァイスさん、タイトル名の提供ありがとうございます！！

自分はシークレットゲームというゼロサムゲーム物の一次創作をメインで書いてましたが書いてるうちにオリジナルのゼロサムゲーム物を一本作ってみたくなつたので本小説をスタートさせました。始まりから終わりまでの大まかな流れは決まっていますので最後まで付き合つて貰えたら嬉しいです。

また、シークレットゲームの小説の方も同時にちょくちょく更新して行きたいのぞちらの方もご覗願して貰えたら嬉しいです。

プロローグへ終わり、始まる』

たいした理由は無かつた。

別段、人生に疲れたとか恋人が死んでその後を追う為とかそんな理由は無い。

仕事も決して順調とは言えたものでは無いにしろ、職場の人間関係も悪くなかった。

もちろん結婚なんてものもしてないし両親の手からは既に離れているので俗に言う家庭の事情ってやつでも無い。

それでも…俺、遼 はるか 彼方は気が付けばナイフで手首をかつ斬つていた。

ああ、ちなみにこの苗字と名前はコンプレックスと言えたが親父が遼 はるか 大地、妹が遼 はるか 海惠というふざけた家系のもの（母親は遼 はるか 春香というある意味でもっとも残念）なので別段気にはしていない。

だから俺にはわからなかつた。

自分が何故、自殺したのか、その明確な理由が。

何か…、何かあつたはずだ。

答えを出すと頭を使おうとするがどうにも働かない。

当然だ、今も俺の手首からはドクドクと血が流れている。

動脈… イツたかな？

痛みに叫ぶ事になるだろ？と思つて事前にテレビをつけたがそこまで必要では無かつた。

今もニュース番組で連續猟奇殺人犯が自殺したニュースをやつてゐるがその中身は俺の耳には通つていかない。

痛みはそれ程でも無かつたがどうしようも無い虚無感に襲われていた、

出血多量により血が足りないのでひつ。

視界がぼやけていく…。

ああ、もう良いや、考えるのは。

流れに身を任せようと目を閉じる。

切つた瞬間は激しく鼓動していた心臓も穏やかで静かなものになつていた

トクンシ…トクンシ

トクンシ…トクンシ。

「クン…クンッ

どれだけ時間がたつただろうか？

心臓の鼓動が止まらない事に俺は違和感を覚えた。

それどころかそもそもぼんやりとしていた頭が今は覚醒している。

ひつひつて思考する事が出来るのが何よりの証拠だ。

これは明らかに異常だ。

目を開けるのが怖かつたが今のこの状況を知る為にはまざ、それが必要だ。

ゆっくりと目を開ける、まぶたはすんなりと上へと上がり。

「シ…」

俺は驚愕した。

そこが”今まで自分が見た事の無い場所”だったからだ。

見慣れたボロアパートの自室から一変、目に映るのは身に覚えの無い部屋。

「ビニだ…ニニは?」

当然の疑問だがそれにに対する答えが出るはずが無い。

目覚めた俺の身体はベッドの上に寝かされている形だった。

決して高級品とは言えない代物ではあるが自室であるボロアパートの煎餅布団よりは寝心地が良い。

俺はとりあえず起き上がるとベッドに腰をかけて部屋を見渡す。

とくに注目すべき家具も置かれていない殺風景な洋風の部屋。

どこかの殺人事件が起こりそうな洋館の一部屋という印象だった。

あるいはベッドと机、それと最早映る事の無いアナログテレビ。

ドアはあるので出られる事は出られるだらうが…、とりあえずは状況の整理が先決だ。

「病院…な訳無いよな」

俺の自殺…厳密には俺は今生きてるから自殺未遂になるが、に気付

いた誰かが救急車を呼んで俺を病院まで運んだ。

そんな事はこの現状を見れば推理するまでも無く、間違いだとわかる。

「……」

俺の右手。

そのリストカットした部分を意図的に見ないよにしながら手を握つたり開いたりしてみる。

ぐつ、ぱっと何事も無く正常に動く、……いや、動いてしまった。

恐る恐るその箇所に薄田で、田を配りさせてみる。

「嘘……だろ?」

傷が消えていた。

あれ程流れていった多量の血も消え去り、普段の、代わり映えの無い自分の腕が見える。

「……なんだってんだ」

状況が掴めずに落胆する。

ふとポケットに何か入っている事に気付く、すぐにそれが何かわかつた。

「…タバコか

箱に入ったタバコと100円ライター、タバコは七本入っていた。

そういうや…持つたままだったか。

そのうちの一 本を抜き取り、口にくわえるとライターで火をつけ、一服をする。

タバコの本数を考えると少し勿体ないかと思ったが何より一度、気持ちを落ち着かせたかった。

「ふうっ…」

肺に入れた煙を吹き出す。

暇つぶしにアナログテレビをつけようかと思つたがリモコンも本体の電源スイッチも見当たらない。

落ち着いて今の状況を整理してみよつ。

俺は自殺の為に右手首をナイフでかつ切つた。

それは間違いないが…、その傷はすでに存在せず、俺の身体はこのどこかもわからぬ場所に移されていた。

ここが病院で無い事は明らかだが、拉致されて来た…と説明する決定的なものも無い。

自殺者を一つの島に送る。

以前、そんな漫画を見たことがあったのでその可能性が脳裏を過ぎる。

「アホくさい、と頭を振つて、ファイクションと現実を混同しないようとした。

「現実…か」

言葉に出して改めて考える。

ここはもしかしたら…死後、天国とか地獄とか、そんなレベルの場所なのではないか？

当たり前だが死んだ後の世界を見た者等居ない。

小説や漫画によく書かれている死後の世界だつてしません、イメージや空想で作られたものだ。

「ただ…」

ここが死後の世界ならば…間違い無く地獄だ。

俺が天国に行けるはずが無い。

「やっぱ…部屋から出るしかないか」

タバコを床でもみ消し、重い腰を上げてよつやく立ち上がる。

… そういえば、机はまだ調べてなかつたな。

「… なつ…！」

視線を机に向け、俺の身体はまた硬直した。

机の上に置かれたそれを手に取り、まじまじと見つめる。

「何で… こんな物が」

ギラリとした刃に俺の顔が写る。

思い出すのは先程の自分の姿。

ナイフで自分の右手首を切るその姿。

そして… 今俺が握りしめているそれはナイフ。

俺が自殺に使つた物よりも刃渡りが長く、鋭い。

形こそ違うが、ナイフで自殺し、気付いた場所に置かれていた物もナイフ。

ゾクゾクと妙な寒気がした。

ブウンッ

「…？」

その時、ずっと沈黙していた背後のアナログテレビのスイッチが入った。

「…おいおい」

「テレビ画面に映ったのは…”見た事の無い生物”だった。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪つか。

「…はあ？」

天使とも悪魔とも見えるその生物を見た瞬間、俺は冷めた。

謎生物のどこのバラエティ番組の企画のマスコットキャラクターのよう
なその出で立ちだ。

『うけけけけけ…』

『画面の中の謎生物は男とも女とも取れないような甲高い声を上げる。
『ようこそ、命を捨てた皆様、皆様は一度、自分でその命を捨てま
した、つまりこれって命がいらなって事ですよねえ』

画面の中の謎生物は一方的にこちらに向けて言葉をかけてくる。

謎生物の言葉、自分で命を捨てた、といつも言葉は間違いなく自殺し
た事を示している。

『つけけけけ…』なので今君達に与えられた命をどう使おうが僕
の勝手です』

「ここ…何勝手に『命を…使つ?』

』こつは何を言つてゐる?

『これより説明会を開催します、皆様は大広間へとお集まり下さる』

「…説明があるのか?」

今この状況に對しての説明ならば俺としても断る理由は無い。

…が、ノリがいよいよどじのバラエティー番組じみてきている。

『説明会の前にルールを一つ』えます、良いですか? 聞き漏らさないで下さいよ、一度しか言わないですよ?』

画面の中の謎生物が勿体振るよつにクルクルと回りだす。

状況が掴めない俺はただイライラとした。

『十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仮して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です』

「…は?」

『うけけけけつ! それでは! 説明会でまた会おうね!』

「なつ…ちよつと待てよ!』

ブツンッ…

俺の言葉に耳を貸すつもりも無いのか、アナログテレビは役目を終えたように電源を切り落とし、再び動かなくなつた。

「上記のルールって…肝心のルールが全然わからんねえんだけど」

一方的に話し掛けられ、会話を終えられたので置いてけぼりにされた感がある。

それにして來た単語がいくつか引っ掛かる。

ルール、禁止部分、成仏。

そして何をしても良いといつ言葉。

「…十三？」

謎生物は確かにそう言つていた。

つまりこれは1-3番目の中のルールと言つた事を考へられる。

そして「ちらりに向けて呼び掛ける時に発した”皆様”といつ呼び方。

ルールを一人に一つずつ聞え、俺は1-3番目、と考えればしつくりと来る。

「他にも…誰か居るのか？」

自分以外にも誰かが居るという安心感に多少心が落ち着く。

だがそれは同時に得体の知れない誰かが居るといつ恐怖も生まれる。

「…くそ」

『気持ちを落ち着かせようと再びタバコを抜き取り、口に加え。

「……」

…止めた。

この先、どれだけ長い間ここに居るかわからない。

別段、ヘビースモーカーという訳では無いがちょっと温存しておいた方が良いだろう。

「…行くか」

ナイフは一応、持っていた方が良いだろうと思いつつ、服に隠しておく。ドアに手をかけて、そういえばと手を止めた。

「鍵…無いんだな」

特に置いておく物も無いので今はそれで良いが…。

考えないようこじつても、これから、について考えてしまつ。

言ことの無い不安が俺を包み込んでいた。

プロローグ『幼なじみ』

バタンツ

部屋を出るとそこには薄暗い通路が広がっていた。

改めて自分の居た部屋のドアを見るといつも『十一寧にも『乙女』『遼彼方』とネームプレートがかけられている。

「…マジか」

まるで招待されたかのような状況に疑問は部屋に居た時よりも更に広がる。

パツと見て自分以外の人間が居るようには見えないが…それは単に通路が薄暗く、奥の方が見えないからだろう。

キュルキュルキュル…。

「…何だ?」

だが…変わりに聞こえてくる車輪を回す音。

バイクや車の類では無い事はゆつくつとした車輪が回る音でわかる。

…だとしたらこの音の正体は何だ?

音の正体を確かめる為に、ゆつくつとその先へ向かつ。

慎重に…、服に隠したナイフをいつでも取り出せるようにしながら、暗がりの中を進み。

そしてその正体を見た。

「 ッー！」

俺はその”正体”を見た瞬間数秒間固まり。

…「」が『天国』だと確信した。

車椅子に座り込んだその”正体”は。

「詩織…、柏瀬かじわせ詩織しおり？」

「…ひやー！」

相手は声をかけられた事が…、いや、名前を呼ばれた事がよっぽど意外だったのだろう間抜けな声を上げた。

「詩織ー…やつぱぱつ詩織なのがー！」

俺は詩織に近付くとその存在を確かめるように身体を掴む。

柏瀬 詩織は…俺の幼なじみだ。

本来なら…一度と会つはずの無い幼なじみ、なぜなら。

「昔のまんまだ…何で…どうなつてる…？」

彼女は… 本来なら二年前に”既に他界している”。

その彼女が…”他界した時のままの身体”でそこにはいるのだから今、目の前にいる詩織の存在が信じられず、その身体にベタベタと触る。

キュルルルツ

「おわつとーー！」

だがそれは詩織が突然車椅子を後ろに引いて後退させた事でストップさせられた。

「かなちや、…彼方？」

遠い昔の呼び方をしようとした詩織は言葉を一度詰まらせ、俺を名前で呼ぶ。

「…わかるのか？」

「何となく…面影は残ってたから、何でここに？」

「それはこいつの台詞…、いや」

詩織がここに居る事で一つ、確信出来た事。

ここが死後の世界だというのは確実だった。

その事を詩織にも伝えよつとした時。

ガチャツ

詩織の背後で扉が開いた。

「…誰？」

現れたのは…今度は知らない女だった。

見た目的な年齢は詩織と対して変わらないであつて、女子高生くらいの少女。

「あ…未娘さん」

詩織は面識があるひしき、その女性の名前を呼ぶ。

「…あなたは？」

知らない人物の登場に俺は少なからず、警戒をした。

「人に名前を尋ねる時はまず自分からじゃない？遼 彼方さん」

「なんで俺の名前を…、詩織から聞いたのか？」

視線を詩織に見せるが彼女は黙つて首を横に振つた。

「変に警戒心を持たれるのは心外ね、私はただネームプレートを見ただけよ」

女は腕を組んで冷静な口調でそつと答えてくれる。

「なるほどな…、んで、改めて聞くがお前は？」

扉に掲げられたネームプレートにはそれぞれ、確かに名前がついている。

“なので”と“あえず”は女の言つ事を信じしる事にした。

「織笠 未娘…」

少女は静かな口調で自分の名前を告げる。

「それで…一人は知り合いみたいだけど、こじがどこだか知ってる？」

織笠の言葉を聞くと彼女も境遇は俺達と変わらないのだろう。

「まあ…？俺も今、気付いたらこの場所に居た」

「やつ…、二人は兄妹…という訳には似てないし」

「だ…誰がこんな奴ときょうだ」

「単なる幼なじみだよ」

織笠は俺と詩織の関係が気になるのか、口を挟もうとする詩織より先に俺はやつを告げる。

「幼なじみ……？隨分と歳が違つけビ」

そりやそつだ、詩織は女子高生、対する俺は二十歳になる。

いや……詩織が生きていれば俺と同じ歳なんだうが。

「ちよつと待てよ、そつちばっか質問してるが俺からの質問も答えて貰うべ」

俺はこの状況を整理する為の最大の問いをこの女にしてみる事にした。

「…ビリビリ

「…」に来る前、最後の記憶を覚えているか？」

…俺と詩織には共通点がある。

それは幼なじみといつ單なる括りでは無く、もっと具体的な物で、だ。

「…」

「もしかして……だけどな、お前は…」

だんまりを決め込む織笠に俺はその答えを先に言おうとした。

「…自殺したら、気付いたらここに居た」

「ツ…」

…やはり、同じだ。

俺は当然として…だが、詩織の死も自殺だったのだから。

「…それじゃあ、あなた達も？」

「ああ、俺も詩織も…」

「アーッ

「ふべつ…」

言いかけた俺の身体めがけて詩織が車椅子事猛スピードで突っ込んで来た。

「痛…、何しやがる…！」

こんな状況でもしつかりと機能している痛覚に恨みながら俺は詩織を睨み付けた。

「…………」

だが俺の怒りは一瞬で片隅の方へと追いやられる。

「…死ね」

詩織は目に涙を溜め、呪いを込めた目で俺を睨みつけていた。

…そうだ。

田の前の車椅子の少女が俺を憎んでいないはずがない。

なんせ今日の前に居る男は幼なじみ… 兼。

自殺の原因を作った張本人なのだから。

「…すまん」

謝つてどうにかなるものでも無く、それでも出来る事と言えば頭を下げ、そう呟く事くらいだった。

「…何について？」

「何について…そりゃ」

…決まつていいだろ。

俺は言葉を続けようとするが…。

「…いい加減に本題に戻つて良い?」

痺れを切らしたのか、織笠がその場の空氣を最初のものに戻した。

心の中で感謝しつつ、俺は”本題”について考える。

「…あ、ああ」

「」の本題ところのは当然、俺達三人の共通点だ。

「さつき言いかけてたけど、あなた達二人も自殺した…といつ事で間違い無いのね？」

「ああ…間違い無い」

背後で睨む詩織の気配に冷や汗をかきつつ、俺は答える。

「一緒に所を見ると…一人は心中でもしたの？」

「だ…誰がこいつとなんか」

「詩織は三年前だ、葬式には俺も行つてゐる」

「ふうん…そんな時”だけ”は来たんだ」

棘のある言ひ方だが俺に反論の権利は無い。

「それが本当なら…私達の共通点は死…、それも自殺つて事か」

「…」こが死後の世界だとしても、三年前に死んだ詩織と今の俺がいつして存在しているのがわからんな」

「…もしかしたらこには本当に時間の概念が無いのかもね」

「時間の概念が無い？時間が流れで無いって事か？」

「…携帯は見た？」

言われてハツと気付く。

あまりにも突然にこの状況におかれさせいか、真っ先に確認すべき事を忘れていた。

「… まず状況を知るのが」「いつこの場合の鉄則だと思つね?」

呆れたような織笠の声だが反論も出来ないので、曖昧な返答と共に携帯を見た。

アンテナのマーク当然立つておらず、圏外だったがそれよりも気になつたのは日付と時間だった。

『16／38【真】』

『0：123』

「… は?」

有り得ない日付と曜日、そして時間。

これが本当なら今日は16月38日の真曜日、0時123分といつ無茶苦茶な時間だ。

「私の携帯も時計も似たような感じ、この意味がわかる?」

「ええ…」

織笠の問いに詩織は神妙にコクリと頷いた。

「」「」のままじやお正月が来ないです

「…………」

大まじめな詩織の問いに織笠は俺達に会つてから初めて目を丸くしていた。

冷静な雰囲気の織笠から初めて一本を取つた氣分だ、… 詩織がだけど。

「彼方… ちょっと」

チヨイチヨイと手招きされたので仕方なく織笠に寄る。

「どうでもいいが呼び捨てかよ。

「彼女つて…」

「ああ… えつと、ちょっと残念な奴でな」

一見クールに見えて実は天然なのが詩織だった。

全く関係無いが小学生の遠足の説明会の時、あんまんはおやつに入りますか? とビツと綺麗に手を上げて質問した詩織の姿を思い出す。

「詩織さん… つまりね、三年前に死んだあなたとその三年を生きた彼方が一瞬に居る、どちらも死んでからここに来たとしたらここには時間、そのものが存在しない、意味の無いものという訳」

少し戸惑いながらも織笠は詩織に状況を説明した。

「なるほど。」

「わかった……？」

詩織がウンウンと頷くと織笠も「安心したよ」とホッとした。

「つまり二年では誕生日が来ないから歳を取らな……って事ね」

「…………」

難しい顔をして片手で顔をおおいつ織笠。

「詩織」

「ううう、助け船を出してやろうと考えた。

つまりだ、あんまんを買つてから二年後にもう一度あんまんを買つたけど、一つの中身はあんまんだったといつ事だ

「なるほど。」

「……それで言つたの？」

半ば呆れた声の織笠に呟つてんだよといふと俺は頷く。

「これで三人……か」

それで納得したのか織笠は長く続く廊下の先を見た。

「私達に振り分けられたナンバーだけね、詩織さんの14番で最後だつた」

「つまり俺達は全部で14人…かな、普通に考えれば

部屋のネームプレートにはN.O. 13と印されていたし、俺はかなり後ろの方だつたようだ。

「ちなみに織笠は？」

「私？私は9番だつたけど？」

「9番…？」

部屋の順は番号の順だ。

なので9番田の織笠が14番田の詩織に最初に出会つた事が気になつた。

「私の他にも何人か居る事はわかつてたから、最初に全部で何人居るのか確認しただけよ」

「…なるほど」

しかし織笠のこの冷静さ、そして行動の速さ。

どこか不自然なものを感じながらも今その答えが出て来るはずは無い。

「とりあえず…なんだが、説明会…つてのに行かないとな」

そこで今の俺達のおかれたこの状況の答えが出れば良いが…。

「賛成…、あつ、だけど他の人は？」

「これだけ通路で話してて誰も出て来ないし、みんなもう大広間に集まつたかもね」

詩織の疑問に織笠が答え、詩織もそれに納得したのかなるほどと頷いた。

「それに大広間に行けばどのみち全員が来るだらう、んじゃ…行くか」

俺はそう言って詩織の車椅子を運転しようかと思い、取つ手に手を置いた。

キュルルルッ

「おわつ…！」

だがそれを拒むように詩織は車輪を回して俺から距離を取るようにならへと進み。

バシンッ

「あうつ…」

壁にぶつかった。

「い、良い、一人で行けるから

顔を赤くさせながらも、それでも詩織は気丈にそつ答える。

「……やうかよ」

俺はやれやれといった具合に詩織の後へと続いた。

「……」

背後では織笠が詩織の車椅子をじっと見つめていた。

プロローグ『大広間』

薄暗く続く廊下を俺と織笠が歩き、詩織が車椅子の車輪を転がしていく。

大広間と書かれた部屋を見つけるのにそう時間はかからなかつた。

中に入ると廊下の薄暗さとは一転して大広間は明るく、暗さに慣れれた目を刺激される。

大広間と呼べるほどの大きさでは無いにしろ、丸い机とそれをぐるりと囲む椅子。

既に8人の男女が椅子に座つており、部屋に入つて来た俺達を一斉に見た。

織笠は冷静に詩織は状況に戸惑い、俺は軽く手を振つての入場。

何人かは手を振り返してくれたが大半は無反応だった。

：これで11人か。

俺と詩織、そして織笠の境遇を考えればここに居る皆も立場は同じなのだろうか？

「…一つ、警笛じとく」

「…ん？」

横に居た織笠がぼつりと俺達一人にだけ聞こえるように呟いた。

「「」から先、不用意な発言や行動は控えなさい」

織笠はそれだけ告げるとさつと前に出て俺達と距離をとった。

「……」

織笠の言いたい事は俺にもよくわかつていた。

この異常な建物に集められた14人。

これから何が始まるかはわからないが良い予感はしなかった。

「… そうね、自己紹介に失敗したら痛い娘になっちゃうじ」

俺の隣に居る一見クールな天然幼なじみは多分、わかつてないだろうが。

俺と詩織も空いている適当な椅子に向かう。

車椅子の詩織の為に椅子を退かし、スペースを作つてやつた。

「さて、これで11人目ね、あなた達、名前は?」

新たに大広間を訪れた俺達三人に向か、一人の女が立ち上がり、声をかけてきた。

歳は…大学生くらいだろうか?

「私？柏瀬 詩織」

「織笠 未娘…」

女性陣一人が先に自分の名前を告げる。

「私は宇佐 飯子よ、よろしく」

宇佐は一人に軽く手を差し出して握手を求める、一人がそれに答えると今度はぐるりと俺の方を見た。

「それで、あなたは？」

「……」

友好的な宇佐には悪いが俺は名前が名前なだけにあまりギャグ染みているのでイマイチ、こういう場で言つのに戸惑つ。

「ちょっと…聞いてるの？」

だがそんな俺の心中なんぞ察せずに宇佐は俺に顔を近付かせて來た。

「…聞いてるよ、んな大声あげなくとも」

「彼方、早く遼 彼方つて名乗らないと皆彼方をどう呼べばいいかわからないんじゃない？」

「いや、もう名乗る必要無くなつたわ」

親切心でやう言つた幼なじみに感謝といつぱの舌打ちをして俺は答えた。

「遼…彼方？」

宇佐を見ると明らかに笑いをこらえるように頬を引き攣らせていた。

「人の名前とか笑うのは失礼だと思つが…」

「そ、そうね…、」めんなさいね、遼 彼方さん

「ちよつと、フルネームとか止めてくんないか」

「なんか語呂がいいから…、それじゃあ、改めてもつ一度自己紹介でもしましようか？」

宇佐が周りをぐるりと見渡しながらやう声に出した。

「お、お、宇佐さんよ、これで何度目の自己紹介だよ？いい加減だるくなるわ」

椅子に寄り掛かつて両手を頭の後ろに置いていた男がつんざつとした声を出した。

金髪のガラの悪そうな男だ。

「大事な事よ、これをしないと誰が誰だかもわからぬでしょ」

そんな男の態度が気に食わないのだろう、宇佐も目を鋭くさせていた。

「だから全員揃つてからやれつたんだよ、俺は」

男は面倒臭さそうにため息をつくと男達の方に向けて片手を上げた。

「赤松 慶一だ、まつ…仲良くやつてこいひや」

赤松は含みのある笑みを浮かべると軽く挨拶を済ます。

「んじゃ、次」

そしてそのまま自分の隣に居るガタイの良い男の肩にバトンタッチするように手を置いた。

「ひこすみ 謹泉 しんいち 紳一だ…」

謹泉は名前だけ淡々と告げると腕を組んで目を閉じた。

恐らくかなり鍛えてある身体も合わせて威圧感がある。

その謹泉の横、まるで謹泉を壁にして赤松と距離を取るようにしている男…いや女?中性的な顔立ちだしどっちだらうか?

「えつと…僕かな?深見 ふかみ 枢 まさき だよ、よろしく、あの…男です」

ペコリと頭を下げる深見と名乗る男は俺の言いたい事がわかつてゐるのかそう付け加えた。

中性的な美青年の顔立ちの女と言われても納得してしまひそうである。

「よひじく、彼方さん

「ああ、よひじく…」

深見は友好的に俺に握手を求めて来たので俺もそれに応えた。

「……？」

不可解なのは深見が俺の手を離さず見つめ、俺の目をじっと見つめていた事だった。

「おこ…手」

「あ…う…ごめん」

深見は慌てて俺から距離を取るみたり離れると両手を振った。

…顔を赤くさせているが、うん、気にしない事にしよう。

「あはは…えっと…じゃあ次は

深見はキョロキョロとメンバーを見渡すと。

「じゃあ私が…」

一人のサラリーマン風の男が立ち上がり、ペニンと頭を下げる。

「榎 昌弘です、いやあ…皆様若い方が多くて少し恥ずかしいですな

榎さんが言つ通り、40代半ばであつた彼の年齢は俺達の中で群を抜いている。

しかしこれで俺達の年齢は本当にバラバラだというのがわかつた。

しかし…どうにも幸薄そつた顔をしているな。

「はは…名刺でもあれば良いんですが、先日リストラされちゃいました」

いや、本当に幸薄いんだこの人…。

「次は僕なんだけど…その前にちょっと一言良い？」

次に自己紹介を始めたのはメガネをかけた太った男だった。

見た目で人を判断すべきでは無いが見た目で判断するなら典型的なオタクに見える。

「…なんだ？」

「そここの車椅子に乗つてるお嬢さん」

「え？…私？」

詩織が自分を指差すと見た目オタクは「クククと頷いた。

「車椅子キャラ来たッ…」これで勝つる…！」

見た目オタク…、いやもつといや、核心した、見た目と違わず中身もオタクだこいつ。

「…えっと、」の車椅子には兵器とか仕掛けで無いけど」

「詩織もこれ以上話をややこしくしないでくれ…、んで、あんたは？」

「大前田 友清だよ、よろしく、遼殿」

「あ、ああ…よろしく」

…あまり深く突っ込まないよひじょひ。

これで大広間に居る男性陣の血口紹介は終わつたが気になつたのは男性陣が固まつてゐる事だつた。

いや…、別に合コンしてゐて訳じやないから別に良いんだが…、それにしてはあからさまに男性陣が一人の女性から距離を置いている。

「なあ、あんたはなんで一人だけ離れてるんだよ？」

俺はその離れている一人の女性に近付き。

「…、来ないで下さい…！」

「…はい？」

思いくそ拒絶された。

「彼方、あなた一体その人に何をしたの！！」

「何もしてなかつただろ？が！今まで見てて！！」

横から来る詩織の怒声を正論で返してやる。

「あつ…すいません、その…、いきなり大声なんて出したりして」

「いや…いいけどさ」

謝る女性に一步近付く。

ガタツ

女性は椅子事俺から離れる。

「……」

一步近づく。

ガタツ

女性は椅子事俺から離れる。

「大丈夫…大丈夫…大丈夫」

女性はそう言いながらも顔を引き攣らせていた。

「彼女は……ちょっと男性恐怖症っていうのかな？それなの

その様子を見ていた宇佐がそう説明してくれた。

「うー、うめんなさい……」

「いや……まあ、いいけどさ」

多少は傷ついていたけど大きく謝る女性になんともない風に応えた。

……なるほど、男性陣が固まつてた訳がわかつたわ。

「わかった、俺はこつから動かないから、そんな怯えないでくれ」

女性から距離を取つて話しかけると女性は「ククク」と首を縦に振つてくれた。

「さつきも自己紹介したけど俺は遼 彼方、こつちは柏瀬 詩織、
もつ一人は織笠 未娘だ、あなたの名は？」

さつきから興味なさそうに場を眺めている織笠の事も紹介しつつ、
俺は再び声をかけた。

「は、はい……、水茂です、水茂 みなも めぐみ」

「そつか、これからよろしくな、水茂さん」

「勘弁して下さい……」

「……」

「今まで拒絶された時は…、やばい、ちょっと泣きやう。

「気にしないで良いと思つよ、僕らもあんな感じだつたし

大前田がフォローを入れてくれた。

「いやあ、男性恐怖症キャラのテンプレはやはり法えらるですね」

いや…フォローじゃ無かつたか。

あ…うん、でもそういうアニメとかでも最近そんなキャラが増えたよな。

「あとは殴つたり暴力振るつたりして来るとかか?」

「…ほほっ、遼殿もなかなか通と見た」

キラリとメガネを光らせて大前田がかっこつける。

「…いや、違…」

オタク…と言える程知識豊富では無いが、まあかじつた程度には知識があつたり。

「なんだよ、大前田の同類かよ…」

「だから違つて…」

赤松が呆れたように茶化して来るのを俺は面倒臭さそつと返す。

別にアニメや漫画といったオタク文化だけで無く、バイクや車、政治からギャンブルの話しだつて出来る。

まがりなりにも社会に出て生活した身として、それは必要な事だつた。

話題を身につければ会話から置いていかれる事は無い。

会話から置いていかれなければ…グループから外れる事も無い。

だからこそ話題性のあるアニメや漫画、音楽にドラマや映画も見て。

ゲームやってギャンブルもやって先輩や友達のススメでスノボーやゴルフといったいろんなスポーツもやって。

楽しかつたかと聞かれればどれも楽しかつたが…結局は中途半端のまま、知識を仕入れ、皆の話しに適当に話しを合わせて…。

そんな生活だつた。

「…それが嫌だつたのかもな」

だから…自殺した、のか？

いや……そんな事、少なからず誰もがやつてゐる事だと思つ。

「……彼方がオタクになつた」

「だから違つて……その虫を見るよつた皿は止めり……」

幼なじみからの視線がキツイ……。

いや、詩織からすれば久しぶり?に会つた成長した幼なじみがオタクになつてたつて事だし、そりやキツイ目にになるか。

「幼なじみ萌え……とか叫ぶ人になるなんて」

「叫ばん叫ばん」

「……叫ばないの?」

いや、そんな素で返されても「こっちが困るんだが……」。

「つーかなんだ?叫んで欲しいのか?」

「そ、そんな訳無いでしょー!馬鹿ツ!……」

「何で怒るよ。」

「ほほう……では遼殿はあくまでもオタクでは無いと?」

大前田が口元に笑みを浮かべながら近付いてくる。

「では…彼女を見てもまだそんな事が言えますかな?」

そして自信満々といった具合にまだ自己紹介の終えていない最後の一人を紹介した。

椅子にチョコソンと座り込んだ少女…、俺達の中でも一際年齢が若い。というか幼い少女。

この部屋に入つて最初にその少女に目がいったのは別に俺がロリコンとかそんなんじやなくて少女の異質のせいだった。

「…」居る者は俺を含め全員私服なのだが…。

その少女は…巫女服だった。

巫女服といつても見た印象で感じた事で普通の神社の巫女さんが着ている正規?の物とは違つっぽいが。

「…」

「彼方…、鼻の下伸びてる」

「あ…いや、違う、そんなんじや無いって」

必死に否定しつつ、巫女服少女に近付いてみる

「…」、「なんに付け…」

少女は怯えながらもぺこりと頭を下してくれた。

「「さあ、名前は？」

「えっと……やのー」

名前を聞くと少女は恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。
その反応を俺はビックリで見たような気がして、それはすぐに思い浮かんだ。

……俺が名前を叫ぶ時と同じだ。

「さあもも言ったが俺は遼 彼方なんつーふざけた名前なんだ、お前は？」

「その……、ひむかー……ひなた、です」

「ひむかー……ひなた？」

なんだ……普通じゃないか、何がそんなに叫びひなたんだ？

「はい、田中向かうと書いて田中、向かうと書いて田中、ひなた、それで田中 田向です」

「……あつ、なるほどね」

「じつかし……こんな子供が居るなんてな 田向 田向、うん、うちのおかんと戻る勝負だわ。

「じつかし……こんな子供が居るなんてな 田向 田向、向かう、うちのおかんと戻る勝負だわ。

「…やっぱ…」ここに居る全員のどれだけが今のこの状況を理解しているのか…。

俺の場合はたまたま詩織の事を知っていたのが大きかったが。

「…え… その、 日向ちゃん、 一人で来た訳じゃなくて」

俺の言葉に宇佐が言ひちらつて話しかけて来た。

「私、 お母さんと一緒にここに来たんです」

「母親…？？」居るんだ？」

宇佐も水茂も大学生くらいだし織笠は高校生、 どう考へても年齢が合わない。

「し、 詩織… まさかお前」

「ふふ… ゆりやく気付いたようね」

詩織はわざとらしく笑みを作つて見せると。

「あなたの子よ」

「な、 なんだつてー」

「ちなみに私は母親じゃ ないから」

「…」

「おい、人を巻き込んで自分だけ逃げるな」

いや、俺が最初詩織をからかおつって思つたのが発端だけど。

「彼女の母親はね、部屋に閉じこもつたまま出てこないんだ」

幸薄そうなサラリーマン（元）、榎さんが心配したよつてやつ言つた。

「出で来ないつて…何してんだよ？こんな子供を一人にして」

普通この訳わからぬ一状況で子供を一人にする親が居るのだろうか？

「あ、あの、うちのお母さんがすいません…！」

俺のハテナマークに答えるように慌てて頭を下げる田向。

「じつはね、わざわざあなた達が来る前にひつじ、その事につけて話したの」

宇佐が深刻そなため息をついて机に手を置いた。

「あなた達も説明会を受ける為にここに来たのよね？」

宇佐の問いつに頷いてみせる。

「僕らもそななんだけどね、なんか始まる気配が全然無いんだよ、誹泉さんなんてもう1時間くらいは待つてるんじゃないかな？」

「…別に、たまたま一番に来ただけというせいもあるがな」

深見が見ると誹泉は淡々とした口調でそう告げた。

「やっぱ全員揃わねーとダメってか、つたぐもたもたしてんじゃねーつづーの」

赤松は面倒臭さそうに悪態をついて不満をあらわにした。

「だから…ね、私達で来ない人達を迎えに行こうって話しおしてたの」

「なるほどね…」

今大広間に居るのは全員で11人。

つまり後三人来ていいって事になるのか。

「日向の母親の他に後二人か…、さすがにちょっと遅いな」

俺と詩織と織笠の三人は通路で話していた分出遅れたが、それよりも遅いという事はまだ気がついてないって可能性もある。

「良いと思つぜ、このまま待つてもいつ来るかわからんし

このまま待つても埒があかないならまだ自分で動いた方がマシだ。

「あの…、なんで来てないのがあと三人だつてわかるんですか?」

水茂が恐る恐るといった具合に手を挙げて発言する。

なるほど、そういうればみんなはまだ知らないか。

「部屋のナンバーは14までしかなかつたし、ここには14人居るつて考えたけど」

俺がそう答えると皆は納得したのか、それ以上の質問は無かつた。

「迎えに行くのは良いけど…、でも全員で一人一人を迎えて行くのつて効率も悪いし、手分けして行かない?」

深見の提案に皆が頷き、俺の方も得に文句は無い。

さて…そうなると俺は。

【A・日向の母親を迎えて行く】

【B・他の二人の中の一人を迎えて行く】

【C・Bとは別の二人の中の一人を迎えて行くか】

【D・と思つたけど動きたく無いしここに留まつ】

プロローグ＜異常＞

「それじゃ、私達を二チームに分けましょうか、日向ちゃんと赤松さんと榎さんと大前田さんで日向ちゃんのお母さんを迎えて行く、その間に私と誹泉さんと水茂さんのチーム、遼、彼方さんと織笠さんと柏瀬さんと深見さんのチームで行きましょう」

「あれ？」

なんか宇佐が勝手にチーム分けして前話の選択肢が粉々に砕けちつちまつたぞ。

【A・他の一人の中の一人を迎えて行こう】

【B・他の一人の中の一人を迎えて行こう】

【C・他の一人の中の一人を迎えて行こう】

「一択じゃねーか。

「おいおい…勝手に話し進めてんじゃねーよ」

これには当然、得に赤松が第一に嫌気がさしたように声を上げた。

「あんたさあ…いつから俺らのリーダーになつた訳？」

「別に…そんなつもりは無いけど、ただ単にこれが一番バランスが

良いでしょ？何があるかわからないんだから」「

食いかかる赤松に宇佐は眉をひそめながらも返した。

確かにバランスという点でみれば宇佐のチーム分けは悪くない。

三人組になるのは体格の良い誹泉が率いている組。

大広間に入る前から事前に面識のある俺と詩織、そして織笠の三人に車椅子の詩織の為か深見の四人。

そしてまだ幼い日向が居る所もきちんと四人チームになっている。

どの組にもきちんと男が居るというのも大きい。

「チームのバランスなんてどうでも良いんだよ、なんであんたがしきつてるかつて聞いてんだよ」

だがこの仕切り分けが良すぎる宇佐のチーム分けは余計に人の反感を食つものだ。

得に赤松なんかは他人の言う事なんぞ聞きたくないという態度だった。

「だからそんなつもり無いって言つてるでしょ？だったらあなたがチーム分けすれば良いじゃない！…」

「… てめえ」

宇佐は腕を組み高圧的に。

赤松は睨みをきかせて宇佐を見た。

「ダメだこりや、売り言葉に買い言葉も良い所だ。

「あ、あの」

そんな一人の言い争いの中、意外な人物が恐る恐ると手を上げた。

「…どうしたの？水茂さん」

「…、男の人と行動するのはちょっと…」

まるで学級委員長が普段発言しないクラスメイトにするように宇佐が聞くと素直に水茂はそう告げた。

「え？あーああ…」めんなさい

だがこの水茂の発言はさすがに計算違いだったのか、宇佐が言葉に詰まる。

「くつくつ…、なんだよ、それじゃこのチーム分けは成立しねえな」

「赤松…いい加減にしろ、話しが進まん」

「…くいへい」

再び赤松が茶化そうとした所を誹泉が言葉を挟み、赤松も素直に引

き下がつた。

「思つたんだけどさ、入れ違いになつたら困らね？ほり…僕らが出てつた後に他の三人が来たりとかわ」

「あ…うん、そうだね、有り得るかも」

大前田の言葉に榎さんが頷く。

確かに…その可能性もあるか、そうなつたら更に面倒だ。

「だつたら…留守番役も必要つて事だよな」

俺は顎に手を当てて考えながら。

「だつたら詩織、水茂とここに残つてろよ」

「え…、私？」

車椅子での移動が仕様の詩織に残つて貰つ事にした。

別にそこまで集団の移動の妨げになる事は無いが…まあ、誰か残らなきやいけないし。

「水茂もそれなら良いだろ？男と一緒に移動も無いし」

「え？あ…はい」

水茂は申し訳なさそうにシュンとなりながらも頷いてくれた。

しかし男性恐怖症ね…、最近漫画とかでよく見るネタだつたけど
ここまでとは。

正直面倒臭さいというのが本音だが本人の前で言うのは止めとこ。

殴つて来ないだけマシかと。

「んじゃそれで決まりだ、詩織と水茂の一人を残して三人チームで
いこう」

「となると

話し合いの結果…と言つても俺のグループは詩織が抜けてちょうど
俺と織笠と深見の三人組になる。

なので田向の母親を迎えて行く四人の中から榎さんが宇佐の居るチ
ームに移った。

【田向・赤松・大前田】

【宇佐・榎笠・深見】

【俺・織笠・深見】

そして【詩織・水茂】の留守番組だ。

「さて…それじゃさつさと行くか

と、大広間を出ようとして立ち止まる。

「…どこにだよ、そつこえれば日向の母親はともかく、他の一人の部屋は知らないぞ」

「あ…そうち、困ったね」

深見も気付いたのかしまったという顔だ。

「それについては消去法ですぐわかると思ひけど…」

「あ…そうち、ここに居る俺ら以外のナンバーの奴の部屋に行けばいいのか」

呆れたように織笠に言われたがそう言われば確かにそうだ。

ええと…俺が13で詩織が14、織笠が9だったよな…。

とりあえずここに居る11人でお互いにナンバーを教え合つがその場面は面倒なので省略しておぐ。

とりあえずの各ナンバーは以下の通りだった。

NO・1・宇佐 飯子

NO・2・榎 昌弘。

NO・3・今だ来ない日向の母親。

NO・4・日向 日向。

NO・5・大前田 友清。

NO・6・居ない…、つまりまだ来てない。

NO・7・水茂 めぐみ。

N O . 8 . 深見 柾。

N O . 9 . 織笠 未娘

N O . 1 0 . 赤松 慶二。

N O . 1 1 . 居ない、もう一人の方か…。

N O . 1 2 . 謹泉 伸一。

N O . 1 3 . 僕：と言つたら名前忘れられそつなんで遼 彼方。

N O . 1 4 . 柏瀬 詩織。

といつ訳で3・6・11のナンバーがまだ来てないといつ訳だ。

「それじゃ、今後こそ行きましょうか」

「気を付けてな」

一旦、大広間を出て三人一組に別れる。

俺と織笠と深見のチームはN O . 1 1 の人物を迎えて行く事になった。

なので一度来た道をまた戻る事になる。

「なんで来ないんだらうね？」

その道中、深見が疑問を投げかけてくる。

「そりや…普通に考えてまだ寝てんじやないか？あのテレビ、お前も見たらう？」

「あ、やつぱり皆の部屋でも流れたんだ」

「 わづじゅなあや姫、大広間に集まらないって」

普通、こんな訳のわからない状況になつたらあのテレビに映つた謎生物の言つ通りに大広間に行くだらうじ。

「 どうかしらね」

「 …あん?」

そんな俺の返答に織笠が口を挟んでくる。

「 ！」の状況がすでに普通じゃないって事に気付いてないの?..

「 そりや…気付いてるナビや、今話して出でるのは状況じやなくて人だ、人」

まるで俺の考え方を読んでいるかのような鋭い問い掛けに俺は一瞬口ごもるがすぐに反論する。

確かに状況は普通じゃない、完全に異常だ。

だがその異常な状況の中で普通、人がどう行動するか、今回はそれについて言つていい。

「 ……」

「 ……」

「 うううと…、喧嘩は止めなつて、あーほりーーついたよ」

睨み合ひの俺と織笠の間に挟まれて、さすがに居心地が悪かったのだ
わ。

「。」。の部屋の前についた深見は嬉しそうだった。

「国崎 瑞穂」

そこには記された名前も大広間の誰のものとも一致しない。

「聞違いないな」

「ううん、誰か居るのかあ……」

中からは何の反応も無かった。

「おーい!誰か居るのかあ……」

今度は呼びかけてみる……が反応は無い。

「ほりな、やっぱ寝てんだよ」

「もしくは入れ違いで居ないのかもね」

肩を竦める俺に深見が言葉を付け加える。

「……そり思ひながら中を開けたらどう?」

だが織笠の態度は変わらず、刺々しいものだった。

「つたく…、素直に負けを認めろよ」

まあどのみち中を確認する必要はあつたが。

「入るぞ~」

返事は期待せずに、扉を開けた。

「…は？」

そして俺は固まってしまう。

予想が外れ、部屋の主である国崎 瑞穂なる少女の座り込んでいる後ろ姿が見えたからだ。

少女はテレビの前からピクリとも動かない。

「…お~い

「…寝てるんじゃないかな

呼びかけてみる…が、返事どころか少女の後ろ姿は全く動かない。

「…座つたままか?…いや、うん…そういう人も居るよな

深見の言葉に頷き、俺は寝てる?少女を起しそうとして。

「…?」

再び…立ち止まつた。

何か：言つてゐる？

ぶつぶつとだが……囁くように微かに、後ろ姿の少女が声を発していった。

君、ヨウ君、リョウ君」

リョウ君？

誰だ…？誰の事を言つてゐる？

少なくとも大広間に居た者の中でリョウ君とやらに該当する人物は居ない。

「リョウ君、私は悪くないの……私は全部あなたの為に、そりや……だ
つて私はあなたの物だもの」「

... 1

国崎 瑞穂なる少女のその異様な雰囲気に背筋が冷たくなった。

だが、ここで声をかけない訳にも行かない。

「おい、聞いてんのか？」

俺は国崎瑞穂なる少女の肩に手を置き、こちらに振り向かせようとした。

すでに後悔しても遅かつたが。

数秒もたたない内に…織笠の言つた事の意味がようやくわかった。

何故…もつと早く気付いて、慎重に行動しなかつたのだろう。
ここに居る者達は…その全員が自殺してここに居る。

つまり…全員が一度、自分を殺している。

その時点で既に”普通”とは掛け離れた”異常”である。

「…あ」

気付いた時にはもう遅く。

圧倒的に手遅れで。

国崎がその手に持つていた脇差しひらこの長さの日本刀が。

今まさに俺の腹を突き刺そうと動いていた。

プロローグ《異常》（後書き）

【おまけ】

詩織「彼方、何してるので？」

彼方「ん？ああ…、ちょっとメモしてあるんだよ」

詩織「メモ？」

彼方「一度にいろいろな奴が出てきたから、誰が誰だかをさわると覚えとかないとな」

詩織「せつこえは彼方、昔から人の顔と名前覚えるのが手だもんね」

彼方「血縁じゃないけどな」

詩織「血縁にしちゃ駄目だけどね」

彼方「よしそと…、これでいいか」

詩織「忘れないよつに前書きに置いておいた方が良いんじゃない？」

彼方「前書きに置くつて何…？普通そこは肌身離さず持つておつして置つだろ…」

詩織「次話から彼方メモが前書きに置かれるよつになりました」

彼方「勝手に話しを進めるな！何その説明口調」

詩織「彼方メモはシナリオが進む事にこまめに更新予定です」

彼方「毎回消しゴム使って書き直せってか、おい」

詩織「では次回もよろしく～」

彼方「：一応、これも書いておくか」

【生存者数・14人】

プロローグ×設定少女（前書き）

【彼方メモ】

N O . 1 . 宇佐 飯子
（うさ いいこ）

『大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて』

N O . 2 . 柿 昌弘。（さかき まさひろ）

『幸薄そうなオッサンという第一印象だつたが本当に幸薄かつた、頭の毛の方はまだ薄くなさうなのでなによりだ』

N O . 3 . 今だ来ない日向の母親。

『母親がこんな場所で子供を一人にするなよ…』

N O . 4 . 日向 日向。

『口リ巫女、それ以上何を望む?』

N O . 5 . 大前田 友清。
（おおまえだともきよ）

『太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うとライト、隠れオタ』

N O . 6 . 居ない…、つまりまだ来てない。

N O . 7 . 水茂 めぐみ。

『男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか?』

N O . 8 . 深見 桝。
（ふかみまさき）

『男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれつきとした男…だよな?』

N O . 9 . 織笠 未娘
（おりかさみこ）

『冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる』

N O . 10 . 赤松 慶二。
（あかまつ けいじ）

『リアルじゃ関わらないようにするだらうヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ?』

『居ない、もう一人の方か?』

『誹泉伸一。』

『服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴』

『俺と言つたら名前忘れそなんで遼彼方。』

『自分の所に何書けつてんだ? とりあえずリストカットで自殺してここに来た、配布されたのはナイフ』

『柏瀬詩織。』

『車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺、あれ? そういうや...何自殺したんだつけ?』

【生存者数、残り14人】

プロローグ『設定少女』

突然の出来事に脳は完全に停止していた。

いや、脳が動いてた所でたぶん、身体の方が反応しないだろう。

人間はだいたい、不意の事態には対処出来ない。

今回のそれが正にそうだ。

「彼方ツ！！」

だから 。

国崎の持つ脇差しが俺の腹の真横を通り過ぎてくれたのは俺では無く、織笠のおかげだ。

彼女が俺の身体を引っ張り、脇差しの一撃から俺を守ってくれた。

それも後数秒遅かつたらどうなつていたかわからない。

「生きて…る？」

へなへなと身体中の力が抜けた。

「う…うわああああああああ…！」

一瞬遅れて深見の悲鳴が部屋に響く。

当然だ、今までに田の前で人が死にそうになつたのを見たのだから。

当人である俺はただ安堵していたが、一步間違えれば死んでいた。

そしてもう一人の当人はと言えば。

「…あなた達、誰？」

…涼しい顔してやがる、信じられねえ。

怒りが込み上げて来た。

「てめ」

「安心して、怪しい者じゃないわ」

くつてかかるうとする俺だったが織笠がそれを制止させるように俺の前に手を出し、国崎に声をかけた。

「…リョウ君はどうしてここに居るの？」

国崎はキヨロキヨロと辺りを見渡し、リョウ君なる人物を探す。

「誰だよ、そのリョウって奴」

「リョウ君はリョウ君だよ、私の恋人、私の運命の人、私の最愛の人」

「……」

「ひとつひとつとした表情を見せる国崎に俺はこの女の正体が予想出来た。

何より目が正気じやない。

「ねえ…この人、大丈夫…なの？」

「大丈夫なように見えるならお前も大丈夫か?って返してやる。」

俺がそう答えると深見もそうだよね、と頷いた。

国崎 瑞穂は間違いなく、正気じやない。

その理由はリョウ君なる人物と関係するのは明白だった。

だったら可能性は二つ。

一つは単純にそのリョウ君とやらの恋人であり、彼が側に居ない事で気が動転している事。

そしてもう一つは…。

国崎 瑞穂はリョウ君とやらに狂氣を纏つた愛を持っている可能性。

ヤンデレ…とかそんな言葉がこいつにはピッタリだと思えた。

「どうあえず…部屋から出て僕らにひいて来て欲しいんだけど」

俺はもう近付きたくないので深見が勇気を出して話しかけてくれた事に感謝。

「嫌ツ！私はリョウ君を探すのーー！」

「…あはは

キツパリとした返答に深見が言葉を失う。

「彼方さん…あの」

「悪いが断る、あんまし関わりたくない」

上目遣いで助けを求めてくる深見の視線に見とれそうになるのを必死に抑え、バツサリと切り捨てた。

こいつは見た目には女にも見えるが俺にその趣味は無い。

「でも、彼女を連れてかないと…」

「ふむ…」

話しあは進まないか。

「ちゅー訳で織笠に頼もう、女同士だし」

「…はあ」

丸投げしてきた俺に対してため息をつきつつ、織笠は国崎に向かう。

「後は私が連れてくから、先に大広間に戻つてて」

「…いいのか？」

「ただ一つだけ、二人に約束して貰いたいんだけど」

織笠がクルリとこちらを向いて、慎重な表情を作る。

「「」での事…、他の誰にも言わないって事、特に彼方」

「まあ…騒ぎをでかくするつもりは無いけどな、何で特に俺?」

国崎が突然人に向けて脇差しを振りかざす正気じやない人ではあるのは事実だが…、ここで騒ぎ立てても面倒が増えるだけだろう。

「深見もそれで良いのか？」

「僕は良いけど…彼女、本当にほつといても大丈夫なの?」

「ただ単にこの状況に動搖してるってなら落ち着いたら大人しくなるだろ」

それがベストなんで…そう願うとしよう。

織笠に国崎の事を任せ、俺と深見は一旦、大広間へと戻る事にした。

「織笠さん、すごかつたね」

「おかげで助かつたわ…、俺ももつと警戒するべきだつたな」

織笠の言う事を素直に聞いてもつと慎重に行動するべきだつた。

「他の皆…大丈夫かな？」

「他の一人が国崎みたいな奴だつたら…わからんな」

いや、あんなのが何人も居てたまるか。

「…！」

「…ん？」

大広間に近付いていくと中から怒鳴り声が聞こえて来て思わず足を止めた。

…「」の声？

「宇佐さんの声だね…相手は誰だりうへ…」

深見も足を止め、俺に声をかけてくる。

たぶん、さつきの様子から見るに宇佐と一番揉めそつなのは赤松だろうな…。

そつと聞き耳…を立てる必要も無く怒鳴り声は聞こえてくる。

「あなたの身勝手な行動のせいでどれだけ他人に迷惑かけたか…わかつてるの…！」

あ～あ、やつてるよ…。

「ツ…またそりやつて逃げようとして…いい加減ちやんと答えなさ

い！」「

いやあ……白熱してんな。

「あなた……さつきからぶざけてるの？私を馬鹿にしてるの……」「…ん？」

違和感……いや、明らかにおかしい宇佐の怒鳴り声に俺は首を傾げた。

「なんか……変だよね？」

深見も気付いたのか、俺に同意を求めてくる。

「変だな……、さつきから宇佐の声しかしねーぞ」

単純に宇佐の言葉を聞いていると会話しているようだが相手の声は一向に聞こえてこない。

まるで宇佐の怒鳴り声が一方通行に相手に向かってるようだが……、もし怒鳴られてるのが赤松ならこんなに大人しくはしてないだろ？

そんな疑問を持ちつつ、大広間へと入り。

「……えつ？」

俺は戸惑いに思わずそう声を出した。

宇佐に怒鳴られていたのは先程まで大広間に居なかつた新キャラ。

サラサラと風が靡けば光が舞つよくな金色の髪が目立つ。

左耳につけてある眼帯が目立つ。

右手にだけ嵌めてある手袋が目立つ。

ゴスロリのフリフリとした衣装が目立つ。

だが何よりもその顔、日本人離れしたとんでもない美少女なのが目立つた。

まるで存在そのものが一つの芸術品のよひに思えてくる少女。

「…詩織、誰だ？あのトングモ美少女は？」

状況を聞き出そうと詩織に近付き、思わず本音が出た。

「彼方…見すぎ」

我が幼なじみはそんな俺の本音に軽蔑の眼差しで返してくれた。

「いや、あれは誰だつて注目すんだろ…」

「…はあ、いいけどね、彼女は宇佐さん達が連れて來た人」

「…マジか」

選択肢を誤った気分だ。

片方はトンデモ美少女、もう片方は脇差し振りかざすある意味トンデモ少女（と言つても容姿はなかなかだつたが）だもんな。

「しかし… なんで宇佐はあんな怒鳴つてんだ?」

宇佐は俺達にも気付いていないのか、少女に向けて怒鳴り続けていた。

「彼方もあの人と話してみればわかるよ」

詩織のうつすらと笑みを浮かべた仕草が気になつたが、言われた通りに話してみる事にする。

「お~い、宇佐、あんまし揉め事はよせりや」

なのでまづは宇佐を退かす所からだ。

「揉め事つて… 私はそんなつもつじや」

「お前にそんな気が無くても結果的に空気が悪くなりや 一緒だよ、ほら、向こう行つてな」

ここで話しきを切らないと今度は俺が宇佐の怒鳴りの対象になつそうで詩織や水茂達の方へ肩を押した。

「… あなたもなの、遼 彼方」

その瞬間、宇佐が小声でそう呟いたのが聞こえた。

… ちょっと恨まれたか?

まあ…あのまま怒鳴らせ続けてたら宇佐本人が恨まれただろうし、これで良いだろ？。

さて…と氣を取り直して少女を改めて見た。

「…………」

言葉を発しない、上の空な少女はまるで一つの人形を思わせる。

「…よつ、俺は彼方、遼 彼方だ、ようしきな

「…………」

俺の自己紹介に少女からの返答は無い。

変わりに紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺へとその紙を手渡す。

【うむ、良い心掛けだ、人の子よ】

中身はそんな感じの良くわかんない文章（字は可愛らしい）だったが、それよりも俺が気になつたのは。

「お前…もしかして、喋れない、のか？」

前にテレビでやっていた声を失つた子供のドキュメンタリー番組を思い出す。

確か失声症という病気があつたはずだ。

「…………」

俺のその言葉に少女は「ククリと頷いた。

「そつか…なんかその、悪いな」

俺はなんだか申し訳なくなつて少女に謝る。

「…………」

そんな俺の態度を見て少女は再び紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺に渡した。

【うむ、私の声に込められた魔力が暴走するのを防ぐ為だ、仕方あるまい】

「……は？」

えーと…、そのー…、うーんと…。

「『ジゴ』ト?」

ちょっと意味がわからない。

【私の前世は強大な魔力を持つた悪魔であり、その能力を私も受け継いでいるのだ】

「…は？」

えーと…、そのー…、うーんと…。

「芝居入って？」

ちょっと意味がわからない。

ティク2を要求すると再び少女はスラスラと紙ヒペン。

【つまり私の発する言葉一つ一つにさえ、計らずとも強大な魔力が付加され、その影響は貴様ら人間世界の】

読むのが面倒になつて来たのでもう良いや…。

つーか…どつかで見た事ある設定だな、おい。

「ちなみに…その眼帯は…田もりいでもしてんのか？」

次に気になつたのは少女の左目に付けられた眼帯。

【魔眼の発動を抑える為の物だ、不便だがこれを外せば世界がヤバい】

…ヤバいらしい。

「…そのかたつぽだけしてん手袋は？」

【右手の暴走を封印する為の物だ、これを外せば私は覚醒してしまう】

暴走するのか覚醒するのかどっちなのだい?...?

「...はあ」

感想としては勿体ないとか残念、の言葉につきる。

トンデモ美少女なのを差し引いてもこいつ、恐ろしこmodoの中二病な電波だ。

これではせっかくの容姿も光輝くはずが無い。

「お前...名前は?」

最後に...仕方ない、といった感じに少女の名前を聞いた。

少女はスラスラとペンで紙に自分の名前を書き、俺に見せる。

【勅使河原 社】

「えつと...う~ん?」

なんと読むのだろう?

「んんかわはら...しゃ?」

俺が首を捻り考え込むと勅使河原はムツとなつて俺からりせつきの紙を奪い取ると。

【勅使河原 社】

てしがはら ゃしき

丁寧にも読み方を追加して書いてくれた。

「つーか本名名乗れよーあ……いや、この場合名乗るって言わないか
勅使河原 社とか…妙に偽名臭い、いや…、僕の考えたカツコイイ
名前みたいな印象だ。

俺も人の事言えた義理じやないが、これは本名だし。

【ほう、気付いたか、私の真名に、だが私の真名を言つた所でお前
は理解出来まい、いや人の子が聞けば耳がただれ落ちるやもしれぬ】

ふふん、と得意げに鼻を鳴らしながら少女は紙を見せてくる。

あ～あ、もう勅使河原でいいや…。

【しかし私の真名に気付くとは、ぬし、なかなかに見所がありそつ
だ】

「…そりゃどうも」

もちろん嬉しくは無いが。

しかしじつや…印象的に生真面目な宇佐が怒鳴り込む訳がわかつた
…。

チラッと宇佐を見ると今にも噛み付きそうな目を向けていた。

…」の二人は根本的に合わないだろうな。

「んで、お前はなんで遅れて来たんだ？」

【暴走しかけた魔力を鎮静化する為に瞑想していた】

つまり寝ていたのだろう。

いい加減相手にするのが面倒になつて来たぞ…。

「きやあつーー！」

「…ん？」

水茂が入り口の方に向けて叫び声を上げている。

つられて入り口を見ると織笠と…、脇差しを持った国崎が居た。

状況の把握に数秒かかり、把握した瞬間後悔した。

片手で顔をおおい、あちゃーみたいな仕草をとる。

「ちょっとあなた！なんなの？そ

「

食いかかろうとする宇佐の首根っこを掴み（面倒事回避の為）、俺は織笠を睨んだ。

「…織笠」

「これが条件だったのよ

織笠は何食わぬ顔でしれつと答えやがつた。

ついでに本人である国崎も何食わぬ顔でしれつと椅子につく。

【あれは妖刀、 笠錦】

「美味そうな名前の刀ですね、 ええ」

得意げに紙を見せてくる勅使河原を相手にせず、 僕はとっちめてやろうかと織笠と国崎に向かう。

そんな僕の行動は新たに大広間に入つて来た人物によつて搔き消された。

「ちょ！ みんな！ 大変だよ！ ！」

大前田 友清が酷く慌てた様子で部屋へと駆け込んで来たのだ。

「…はあ」

隠す事の出来ない溜め息が出てきた。

プロローグ『宗教狂い』（前書き）

【彼方メモ】

N O . 1 . 宇佐 飯子

『大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器：？】』

N O . 2 . 榊 昌弘。（さかき まさひろ）

『幸薄そうなオッサンという第一印象だったが本当に幸薄かつた、温厚な人【配布武器：？】』

N O . 3 . 今だ来ない日向の母親。

『母親がこんな場所で子供を一人にするなよ…』

N O . 4 . 日向 日向。

『口リ巫女、それ以上何を望む？【配布武器：？】』

N O . 5 . 大前田 友清。

『太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言ひとライト、隠れオタ【配布武器：？】』

N O . 6 . 勅使河原 社。

『前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中一病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつければ良いってもんじやない【配布武器：？】』

N O . 7 . 水茂 めぐみ。

『男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか？【配布武器：？】』

N O . 8 . 深見 杠。

『男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれつきとした男…だよな

?【配布武器：？】』

N O . 9 . 織笠 未娘

『冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、な

のに俺はタメ口されてる【配布武器・?】』

N O . 1 0 . 赤松 あがまつ 慶二 けいじ。

『リアルじゃ関わらないようにするだろ?ヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ?【配布武器・?】』

N O . 1 1 . 国崎 くにさき 瑞穂 みずほ。

『殺されかけた、怖い、マジ怖い、新ジャンル、ヤンデレだけど病む相手が居ない【配布武器・脇差し】』

N O . 1 2 . 謙泉 ひいすみ 伸一 しんいち。

『服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴【配布武器・?】』

N O . 1 3 . 遼 はるか 彼方 かなた。

『自分の所に何書けつてんだ?とりあえずリストカットで自殺してここに来た【配布武器・ナイフ】』

N O . 1 4 . 柏瀬 かしわせ 詩織 しおり。

『車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺【配布武器・?】』

『【生存者数、残り14人】』

プロローグ『宗教狂い』

「どうしたんだい？ 大前田君、そんなに慌てて」

慌てた様子で大広間に入つて来た大広間を榊さんが心配するように声をかけた。

「そ、それが…、ゼエツ、…ヒイ、フウ…」

走つて来たのだろう、大前田はまず乱れた息を必死に整えている。

「大前田…、お前、一人か？」

諂泉に言われてそういえばと思い出す。

大前田は日向や赤松と一緒に日向の母親を迎えて行つたはずだ、それが今一人という事は。

「何か…あつたのか？」

「それが…日向ちゃんの母親、ちょっとおかしくつて

ちょっとおかしい…ね。

国崎、勅使河原と続けてちょっとどうかかなりおかしい人物と会つたおかげか、大して驚きはしなかつた。

しかし大広間に来なかつた三人の全員がハズレとは…。

「それで赤松殿が、その…キレイ」

「まさか…暴力振るつたの？」

宇佐の言ひ可能性は否定出来なかつた。

「わ、わからないけど…、なんかまづやうだつたから、みんなを呼ぼうつて思つて」

…まづいな。

ただでさえ今のこの異常な状況だ、ふとした事がきっかけで全員がパニックになる可能性もある。

「…赤松を止めに行かないと、誰泉、一緒に来てくれ」

「別に良いが…」

この中で赤松を止めるのに一番都合が良いのは一番ガタイの良い誰泉なので俺は声をかけた。

「う、ちょっと待つて、彼女をほつて置くの？」

だがそこで宇佐が反論を上げてくる。

ここでの宇佐の言ひ彼女とは当然、脇差しを常備している国崎の事だ。

…確かにもし国崎が暴れ出したなら状況はもつとまづくなるな。

脇差しという目に見える恐怖に俺は国崎と赤松の危険性を天秤にかけた。

「…わかつた、なら誹泉には残つて貰つか」

そして結局国崎の危険性の方を上位とした。

一度襲われた分の経験が決定的である。

「俺はどちらでも構わんが、お前は大丈夫なのか？」

「俺は…大前田、場所の案内を頼む」

「マジで？僕？」

別に案内と言えるほどの必要は無いが、一度日向の母親の部屋に行つている大前田が居た方が移動はスムーズだ。

「あとは…」

俺はぐるりと大広間にいるメンバーを見渡した。

途中、詩織と目が合い、彼女が手を上げるが華麗にスルーする。

詩織には悪いが時間が無いのだ、車椅子の移動に付き合つ事は出来ない。

「榎さん、良いですか？」

「わ、私かい？」

自分の名が呼ばれた事が意外だったのか、榊さんはびっくりした声を上げる。

赤松を説得出来そうな温厚そうな人、という事での採用だ。

「よし、急ぐぞ」

時間も無いので飛び出すように大広間を出て通路を駆ける。

田向の母親の部屋まで行くのに時間はからなかった。

が…、そこで俺は立ち止まり、言葉を失う。

壁に身体を寄りかけ、イライラしたように足踏みをする赤松と。

髪が乱れ、殴られた後のように頬を赤く腫らした田向が床に座り込み、顔を俯かせていた。

「…あ」

田向は俺達に気付くとゴシゴシと巫女服の袖で目を拭ぐ。

涙を拭き取るよう。

「赤松…、何があった？」

大前田から聞いた話の流れのままであれば赤松が暴力を振るつたとしても日向の母親に対してのはずだ。

何故日向が俯き、頬を赤く腫らし、泣いている？

「あん？ なんだよ、その日」

「遼君… 何もそこまで喧嘩腰にならなくても」

思つてた以上に赤松に対して敵意を見せていた俺を榊さんがなだめる。

「まさか… だけどな、お前、日向を？」

殴つたのか？

と後に続かせる言葉を俺はぐつと飲み込んだ。

「… だつたら？」

赤松はへらへらと笑うようにそう答えた。

「てめ

「違うんですけど…」

赤松に詰め寄るつとした瞬間、日向が大声を上げた。

「これは… 私が自分でやつたんです」

「…何言つてんだよ、そんな訳　　」

「ありますー私が自分でやつたんですよーーー。」

俺の言葉に被せるように田向の必死な訴えが響く。

「…田向？」

その必死な様子に戸惑い、それ以上の言葉が出て来なくなる。

田向からは話しが聞けそうに無い、となればやっぱ赤松か。

「赤松殿…、今北産業」

「はあ？何言つてんだてめえ？」

恐らくは俺と意見が一緒だったであらう大前田が赤松に声をかけるが、その聞き方は通じないだろ…。

「結局…何があつたんだ？教えてくれ」

なので俺は改めて赤松に聞く事にした。

「そこ」のガキの母親がな、いきなり俺らの事を汚れた魂とか不浄な者とか言い出したんだよ」

「うん、そこまでは僕も知ってる」

…って事はそれで赤松がキレた訳か。

「んで、あんましナメた真似してつから黙らせてやるわ。」
と脅かしてやつたんだよ」

そう語る赤松はへらへらとした笑顔だった。

「…暴力とかしてないよね？」

榊さんが不安そうに聞くが赤松の方はへらへらとした笑顔を消さない。

「手は出してねーよ、本当にしみつと脅かしてやつただけだ」

…脅かしての部分が気にはなるが、今は状況の把握が優先か。

「やしたらあのババア、自分の娘をえらい形相で睨みつけて無理矢理自分の部屋に引っ張つてつたんだよ、んで今出て来たのが娘の方だけ」

「…それじゃ、日向のそれは」

一度母親に連れられて部屋に入った後、出来たもの？

「私…です、私がお母さんの部屋に入った後、勝手にやりました」

「日向、いい加減本当の事を…」

ギイツ

「何言つてゐのかしら？全部本当の事、ビリヒト嘘があるの？」

俺の言葉を遮り、扉が少し開くと一人の女性が顔を出した。

赤松はババアと言っていたが年齢的には30代の後半といった所か。マダムとも呼べる品のある顔立ちのはずだが、その顔は妙に歪んでいた。

「…やっぱ…扉にネームプレートがあるはずだ。」

田線をネームプレートに向けると【日向 ひむかい 田景 ひかげ】と書かれていた。

間違いない…日向の母親だ。

だがこいつの異様な雰囲気は何だ？

「…だつてどう考へても変だろ、自分で自分を殴つたつてのか？」

「ええ、そうよ、日向はね、そういう病気なのよ、ねえ？」

日景が…、日向の母親が、母親らしく、日向に微笑みかけた。

ビクッと日向が身体を震わせた。

「…はい」

自分で自分を傷付けてしまう。

…そういう病気の事は聞いた事がある。

この建物が本当に自殺者を集めているなひつひつせだらう。

だが……違和感は無くならない。

「それとも田向……、わつきまでの一言葉は、嘘、だったの？」

”嘘”の部分を強調した田景の物言いは圧力をかけるようだった。

「あの……その」

田向は何かを言いたげに一瞬、俺を見たが。

「……田向、嘘つきはミハシラ様の」

「ツー私ーです、私が…自分で…自分を、殴りました」

「……ほうら、言つたでしょ？」

田景は能面が張り付いたような笑顔を俺達に見せる。

「魂が汚れてた者だから、こいつって人を疑うのよ、汚れた魂は淨化しないと

その笑顔と後に続く言葉に俺は酷い嫌悪感を覚える。

「うわ……また出たよ、ぶつ飛んでるなあ

「……チツ

赤松と大前田の様子を見るに汚れた魂とはこの事だったか。

「日景さん……だよね、どうか我々と一緒に来て欲しいんだが」

榊さんがかしげまるように頭を下げて日景に同行を求めた。

さすがに一番の年長者なだけはある、連れて来て正解だった。

下手したら俺も赤松と同じやり方をやりそつになるし。

「…あなた達、全部で何人居るの？」

「私達ですか？あなたと日向ちゃんを入れて14人ですが？」

「…汚れた魂がそんなにも、早く浄化しないと」

会話になつてはいけないが、それでも日景は俺達について来てくれる
ようだ。

6人になつた俺達は再び大広間へ戻るつとする。

「…あの」

不意に服を引っ張られ、俺は立ち止まつた。

「手を、繋いでも…良いですか」

日向だった、前を歩く日景の様子を恐る恐る見ながら俺に声をかけ

てぐる。

「え？ ああ」

突然の事で戸惑いながら出した手だったが田向はすぐに掴んでくれた。

「あの…、やつはあつがといひやります」

「わつわつて…俺は何もしてないぞ」

「心配してくれてたみたいだつたので、その…嬉しくて」

田向は顔を赤くさせて俯いた。

「… なあ、お前の母親」

なんなんだ？と次に言おうとした言葉を飲み込む。

あんなのでも自分の母親がけなされれば田向も辛いかと思つた。

「あはは…、彼方さんの言いたい事、わかります」

田向は寂しそうに微笑む。

子供のするものとは思えないその表情に胸が痛々しくなつた。

「お母さん…、お父さんが死んじゃつてから、その…悪い人達に騙されで」

「人間不信になつたか？」

「…それもありますが、その…宗教を」

「宗教狂いか…」

汚れた魂やら浄化やらやたらに使つてたのは何のせいか。

「私もよくわからんですが、ミハシリ様つて神様を崇める教団みたいですね」

「じゃあお前のその格好…」

正規の物では無いが巫女装束というイメージを見せる口向の格好。

「私は…、神子らしいです、神の子と書いて神子」

そう答える口向は酷く辛そうな表情だった。

何か嫌な思い出を思ひ出さないよひつじていろのような…、そんな表情。

「つたぐ…、自分の考えを子供にまで植えんなつて話しだな」

子は親を選ぶ事が出来ない。

理解も出来ないうちに無理矢理宗教の教えを押し付けられた口向の境遇は酷く辛いものだろつ。

「…辛いなら我慢すんなよ

「…ありがとうございます、その、また…戻させて下さいね」

田向は顔を赤くさせながらも手をバツと離した。

「…ふう」

しかし…田向の母親、田景。

宗教狂いとは厄介な思想の持ち主だな。

「賢者タイムですね、わかります」

「わかられてたまるか…オタ脳」

言つてる意味がわかつてしまつのがムカつく。

「これで…全員か」

ナンバーは全部で14、そして出揃つた14人の人間。

大広間に戻り、”何か”が始まるのは間違いない。

この訳のわからない状況から抜け出せるはずの”何か”が

「ソリに皆集まつてるよ」

先頭を歩いていた榎さんが田景にそう説明する。

ガチャリッ

と、大広間への扉を開き、俺達六人は足を踏み入れた。

その瞬間

『パンパカパーン　パンパパンパカパーン　ようこそ”てんごく”へ、クズの皆様！！』

場違いに明るいセルフファンファーレと共に。

俺達の目の前に”ソレ”は現れた。

一本目【ひめじめ、てんじへく】（前書き）

【彼方メモ】

NO.1 宇佐 飯子

『大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器：？】』

NO.2 榊 昌弘

『幸薄そうなオッサンという第一印象だつたが本当に幸薄かった、

温厚な人【配布武器：？】』

NO.3 日向 日景

『日向の母親、ミハシラ様といつ神様を崇める宗教団体を信じてる、

宗教狂い【配布武器：？】』

NO.4 日向 日向

『母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持つてている【配布武器：？】』

NO.5 大前田 友清

『太った男、オタク、何か同類のようと思われてるが俺はどっちか

つて言うとライト、隠れオタ【配布武器：？】』

NO.6 勅使河原 社

『前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつけられれば良いってもんじやない【配布武器：？】』

NO.7 水茂 めぐみ

『男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布

武器：？】』

NO.8 深見 枝

『男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれつきとした男、だよな

？【配布武器：？】』

N O . 9 . 織笠 未娘
おりかさ みこ

『冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、な
のに俺はタメ口されてる【配布武器…?】』

N O . 1 0 . 赤松 慶二
あかまつ けいじ

『ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレイ【配布武器…?】』

N O . 1 1 . 国崎 瑞穂
くにさき みずほ

『言動が病んでる、脇差し、笠錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩
く【配布武器：脇差し】』

N O . 1 2 . 詫泉 伸一
ひいずみ しんいち

『服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】』

『 N O . 1 3 . 遼 彼方
はるか かなた

『自分の所に何書けつてんだ? とりあえずリストカットで自殺して
ここに来た【配布武器：ナイフ】』

N O . 1 4 . 柏瀬 詩織
かじわせ しおり

『車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは二年前、自殺【配布武器…?】』

『【生存者数、残り14人】』

「あ…ああッ…」

その存在を知り、俺は驚きに声を発した。

その存在を、俺は知つてゐる。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪つか。

そこに存在してゐるのはあのアナログテレビに映つていた謎生物、そのものだった。

テレビ内ならばどんな生物が出たつて驚きはしない。

作り物やCG等使つていいくらでもでつちあげる事が出来るからだ。

だが…これは。

今俺達の目の前に居るロイツは、紛れも無く”現実”だ。

『つけけけけけッ！いや、良いねえ良いリアクションだよ、皆』

…俺だけで無い、その場の誰もがそいつの出現に驚きを見せてゐる。

『突然の事に呆けてる人も多そつだし、もう一番言おうかな、クズの皆さん、ようこそ”てんじぐく”へ』

ソレは俺達を見渡し、確認し、もう一度、伝えた。

男とも女ともとれない声。

てんぐへ……天国？

ここが天国だつていうのか…コイツは？

『僕は皆さんの生活のナビゲーターを勤める、天鬼ちゃんです』

そしてその謎生物は自らの自己紹介と共に頭を下げた。

「…やつぱり、僕死んだんだ」

深見が自分の身体を確認するように見渡し、やつ喝了いた。

死ぬ前…つまり自殺の寸前の記憶は俺を含め、誰もが持つていてるようだ。

「ち、ちょっと待ちなさいよ、ここが天国だつていうの？」

『ん～？やつだよ、ここは”てんぐへ”ですよ～、よつよつ…』

宇佐の疑問に謎生物…、いや、天鬼、は陽気に答えた。

「こじが…天国？なんだか随分とイメージと違つね

「可愛い天使たんはどこですか？」

神の持つ天国のイメージと大前田持つイメージに違はあるようだつたが俺のイメージとしちゃその両方を合わせたものだつたりする。

いやあ…だつてさ、ほら、天国なんだし。

『「ハハハ…何を言つてるんだいー」こにホラ、天鬼たんが居るじやない…』

心外そうにいじけた天鬼が必死に自分をアピールした。

「あの…、じこが天国なら、普通、あなたは天使になるのでは?」

『やれやれ、やつぱり君達はクズだねえ』

謎生物を警戒してか恐る恐ると水茂が手を上げるが自称天鬼はやれやれと首を振つた。

「てめえ、なあおい、さつきから黙つて聞いてりや人をクズ呼ばわりとはナメてんのか?」

『うけけけけけッ！怒つちゃつた？だつて事実じやん、クズじやん、しょーがないじやーん…』

赤松の脅しも天鬼にとつてはどい吹く風といった具合だ。

『何故ならー君達は全知全能たる「ゴッド」！神様から頂いた命を自分でわざわざ捨てちゃつたからでーす』

そう宣言し、天鬼はうけけけけけッ！！と続けて笑つた。

これは…間違いなく俺達がここに来た原因を指している。

つまり…自殺。

『そんなクズな君達が天国なんて素晴らしい場所、行ける訳無いじゃん』

「…つまり、お前はここが地獄だと言いたいのか？」

『もー…せりきから言つてるじゃんか、ここは”てんじく”だつて』
…頭がこんがらがつて来た。

ここは地獄じゃなく、天国でもない、でもてんじく？

「…結局、お前は何が言いたいんだよ？」

『つまりねえ…、自殺した人間は天国にも地獄にも受け入れ先は無い、だからここに集められます』

自殺した人間は天国にも地獄にも行けない…、そんな言葉を聞いた事がある。

だつたら…ここは？

『ここはそんなクズの皆さんが流れ着く死後の世界、天国でもなければ地獄でもない、天の獄と書いて天獄でーす…！』

天獄。

単純に読むとなれば天国と同じだが…その意味は真逆と言えた。

天国や地獄はある程度、イメージといつかどついた場所かといつ漠然とした想像は出来る。

だが…ここは天国でも地獄でも無い、天獄といつまたく別の世界になつてゐる。

『…ここまで言えばクズな皆さんでも、だいたいは理解できたかなー?』

ガタンツ

「ツーーー」

突然、赤松が立ち上がり、椅子を蹴飛ばした。

「てめえ…いい加減にしろよ?さつきから散々人を馬鹿にしやがつて!!」

その赤松の今にも殴りかかりそつた雰囲気に俺ものまれかける。

…やるのか?

「やるのか?口を黙らせてやるよ…」

『…………』

赤松の拳が天鬼へと迫り。

「や、止めた方が良いよ！赤松殿！！」

そんな赤松を止めたのは意外にも大前田だった。

「ああ？なんだよてめえ、何で止めんだよ？」

大前田に止められた事が余計に神経を逆なでたのか、赤松は噛み付くように大前田を睨んだ。

「その……部屋を出る時、そいつが言つてたんだよ、天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止ですつて……」

「それって……」

ルール……か？

までよ……確か俺が聞いたルールは。

【十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしてても自由です。】

そうだ……これだ。

つまり……大前田の言うルールが本当なら、あのまま行けば赤松は禁止部分に触れ。

”成仏”…したって事か？

『その通りだよ、いやあ、命拾いしたね赤松君、あつ…もう死んでるんだつけ？うけけけけけッ！！』

天鬼は腹を抱えてげらげらと憎たらしく笑った。

「禁止だあ？それがなんだってんだよ」

「…部屋を出る時、私達それにコイツからルールが『えられたはずよ』

織笠が淡々とした冷静な口調でそう答えると他の皆もそういうふうと声に出す。

『…そういう、だから本当は説明会なんていらないんだけどね～』

「どういつ事？」

『君達それぞれに』『えたルールはバラバラだから、皆で教え合えばすぐにわかるよ』

つまり…必要なのはルールの確認か。

「それじゃあ…ナンバー1の宇佐から順にルールをまとめていくか

「…その必要があるわね、えっと、私が聞いたのは」

【壱・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、し

たがつて天獄にいる者は全員自殺した事のある者です】

「これは……さつき天鬼が言つてた事だな」

これについては事前に詩織の自殺を知つていたので、俺の方は問題無い。

自殺した瞬間の記憶も持つてゐるし。

「…………」

詠泉の言葉に異論を唱える者も出でこない。

つまり……本当に、ここに居る全員が自殺者という事になるのだ。

その経緯はどうあれ、自分で自分を殺した者達の集まり。

……誰も言葉を発せず、大広間が重い空氣に包まれる。

皆がその時、その瞬間の自殺する光景を思い出してゐるのか。

だが……俺は。

俺の自殺の理由は……得に無い。

何と無く……と言つた所で理解出来る者等、誰もいやしないだらうが。

「…………」

……国崎や勅使河原、日景の事を頭のおかしい奴呼ばわりしたがそ

じゃない。

「何つて…部屋を出る時にアナログテレビにあの天鬼つてのが映つた。」居る奴が自殺という正氣の沙汰じゃない経験を得てここに居るのだ。

今、この場に”まともな奴”なんて居ない。

「道理で、癖の強い個性的な奴ばつかな訳だと俺は心の中で自笑した。

ぐいぐいっ

「…ん？」

「…この天然クール娘はそれさえわかつてなかつたのか。そんな俺の服を誰が引っ張つて振り返つて見ると詩織だつた。

「ねえ…彼方、皆何の話ししてるので？」

「…」

「ルールの確認だよ、お前も部屋を出る時に一つ言われただろ？」

俺はひそひそと説明してやる。

「…何、それ？」

「…何つて…詩織の方はまだピンと来ていないようだ。

「何つて…部屋を出る時にアナログテレビにあの天鬼つてのが映つた。」居る奴が自殺という正氣の沙汰じゃない経験を得てここに居るのだ。

て言つてたる?」

更に説明を加えてやる、以前からコイツを知つてるので別にいつきはしない。

「… てた」

「…え? なんだつて」

詩織が小さく呟いたその一言を俺は聞き取れなかつた。

だからわつ一度言つよつて詩織に聞き。

「テレビ…壊れてたの」

その一言は、固まつた。

一本目【不信】（前書き）

【彼方メモ】

NO.1 宇佐 飯子 うさ いいこ

『大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…?】』

NO.2 榊 昌弘 さかき まさひろ

『リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…?】』

NO.3 日向 日景 ひむかい ひかげ

『日向の母親、ミハシラ様といつ神様を崇める宗教団体を信じてる、宗教狂い【配布武器…?】』

NO.4 日向 日向

『母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持つていて【配布武器…?】』

NO.5 大前田 友清 ひむかい ひなた

『太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかつてしまうのが悔しい【配布武器…?】』

NO.6 勅使河原 社 てしがはら やしろ

『前世が悪魔にて自身も強大な魔力をを持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる【配布武器…?】』

NO.7 水茂 めぐみ みなも

『男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器…?】』

NO.8 深見 桀 ふかみ まさき

『男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれつきとした男…だよな【配布武器…?】』

NO.9 織笠 未娘 おりかさ みこ

『

『冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる【配布武器：？】』

N O . 1 0 . 赤松 あかまつ 慶二 けいじ

『ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレイ【配布武器：？】』

N O . 1 1 . 国崎 くにさき 瑞穂 みずほ

『言動が病んでる、脇差し、笠錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩

く【配布武器：脇差し】』

N O . 1 2 . 謙泉 ひいすみ 伸一 しんいち

『服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器：？】』

N O . 1 3 . 遼 はるか 彼方 かなた

『自分の所に何書けつてんだ？ととりあえずリストカットで自殺して

ここに来た【配布武器：ナイフ】』

N O . 1 4 . 柏瀬 かしわせ 詩織 しおり

『車椅子愛用な幼なじみ、テレビが壊れてルールがわからない【配布武器：？】』

【生存者数、残り14人】

一本目【不信】

「壊れてたって…、あのテレビがか？」

「私が起きた時には壊れてたけど…そんなに重要だったの？」

…頭が痛くなつて来た。

…めぐ漫画とかの吹き出しに出てくる表現の黒いモジャモジャを俺も出してしまいそうだ。

詩織があの放送を聞いていないつて事は詩織の持つルールはわからぬいという事だ。

「もしかして…普通は壊れて無かつた…り？」

そり、まさに普通は壊れて無かつたりするはずだ。

「…ん？ちょっと待て、それなら何で詩織は大広間に集まる事を知つてたんだ？」

「それは織笠さんに教えて貰つたからだけど…？」

「…織笠…か、そういうば、織笠は真つ先にナンバーが全部でいくつあるかを確認しに出て…。14の詩織と会つたんだよな。

…だつたら、詩織が田を覚ます前にテレビを壊したつて可能性も？

と、考えてすぐにそのアホな考えを捨てた。

まずわざわざテレビを壊すメリットがわからない。

ルールも足りなくなるし、そもそも壊すなら詩織以外のもの壊すだろ
うし。

…となりや。

あの天鬼つて奴の仕込みか、これが一番しつくり来るし。

「ルールの確認の前に…ちょっと良いか?」

『はあい? 何かな遙 彼方君、何か質問かな?』

俺が手を上げると天鬼はまるで生徒を指す教師のように返して來た。

フルネームな辺り、確實に馬鹿にしてんな…。

「詩織は部屋のテレビが壊れててルールをまだ見てない」

俺のその発言は必然ながら全員に動搖をくえ、眞がざわついた。

「このままじゃルールは全て埋まらない、わかるだろ」

だから俺は天鬼に本来詩織が知るはずだったルールの発表を求める。

『ふうん、 そうなんだ』

返つて来た返事は… それだけだった。

「そりなんだつて…、おい！詩織のテレビは壊れてたんだぞ？お前が用意したかは知らないが詩織の知るはずだったルールを伝えるのがスジだろう…！」

『遙 彼方君、君は一つ勘違いをしてるよ』

わざとらしく咳ばらいをし、一瞬の間を置いて。

『彼女のテレビは”壊れてた”んじゃなくて”壊された”、もちろん、僕はやってないけどね』

「なつ…！そんな事やって得する奴なんて俺達の中に居ないだろ！」

『そんな事僕に言われても知らないよ、やつた人に言つんだね』

「てめ 」

思わず拳を握りしめたがそれを天鬼に振るつ訳にも行かず、唇を噛み締めた。

コイツを殴つてしまえばルールの禁止部分に触れる事になる。

『うけけけけッ！残念残念、言つとくけど僕は君達の行動には一切干渉しないよ、悪魔でもナビゲーターだからね、天鬼だけど…！』

悪魔と天鬼をかけたシャレのつもりか天鬼本人は自分で言つて大爆笑していたが俺達にそんな余裕は無かつた。

「…え？ いつまじゅつか？」

「どうするも何もわからないなら仕方ないでしょう…、とりあえず今はわかるルールを確認しましょ」

水茂がおどおどしながら聞くと宇佐がそう答えた。

「なら次は…」一番田の私が、ええっと…「確か」

「ちょっと待ちなさいよーー！」

榊さんが立ち上がり、自身が聞いたであろうルールを思いだそうとしている中、声を上げる人物が居た。

「…お母さん？」

日向が見上げるのは今までに榊に待ったをかけた自分の母親である田景である。

「ええっと… 田景さん？ どうしたのかな？」

榊さんが戸惑つたように聞くが田景は榊さん等眼中に無いよう人に陰悪な顔で睨み付けている。

「あなたは席を外すべきよ、そつよ、それが良いわ」

「…え？ あたし？」

…詩織だつた、言われた本人である詩織はポカンとしているが。

「なつ…、あんたは何を言つてゐるんだ？」

それも当然のよつこやつ話す日景に俺は睡然となつた。

「だつてあなた、自分のルールを知らない、つまり情報交換が出来ないのでしょう？交換できる物も無いのに情報だけ聞こつなんて虫が良すぎない？」

日景は一二三四の能面が張り付いたよつた笑みを見せる。

「それは…詩織のせいじゃないだら、テレビが壊…、れてたのが原因だ」

一瞬、弾みで”壊された”と言いつになつた口を必死につぐみ、軌道修正といふ。

これを言つてしまえば確実に争いの種になつてしまつからだ。

「つーかよ、そもそも誰がテレビを壊したんだよ？あつ？」

だがそんな思いも虚しく、赤松がギョロリと俺達を見渡した。

ざわついた嫌な空氣が広がつていへ。

「そもそも…本当に彼女が起きた時にテレビは壊れたのかしら？」

「…何が言いたいんだよ？」

…今だに一二三四とした顔を止めない日景にさすがにムカついてき

た。

「彼女がルールを知った後に自分でテレビを壊して、ルールを自分で独占した、そつは考えられないかしら？」

「…考えられるの？」

…俺に聞いてどうすんだよ、この天然娘。

しかし「の日向の母親、面倒臭い性格してやがる。

「だからって出てけは無いだろ、詩織が出て行かないなら？」

「彼女に私の知るルールは教えないわ」

…それじゃあどうちみち詩織は日向の知るルールはわからないじゃねえか。

…カチンと来た。

…なら俺のルールはあんたには教えねえ

「…彼方？」

「あ、あなた何言って…」

「悪いが俺達は幼なじみでな、情報を共有しようつと思つ

幼なじみと言つて何人が驚いた表情を見せた。

…やつこやまだ言つてなかつたつけ？

まあ今はそれ所じや無いが。

「…いいわよ、でもね」

田景は一タアと笑つと首をグルリと動かし、自分の子供である田向を見た。

「この子のルールもあなた達はわからなくなるわよ」

「…え？」

でも當然のよつてやつての田景を田向は呆然と見つめた。

「ね…田向、田向はお母さんの言つ事をやけんと聞くへ良い子よね」

「で、でも…」

田向がチラリと俺達の方に田線をやつた。

俺達の事を氣遣い、心配しているのが良くなかった。

グイッ

だがその表情は次の瞬間、悲痛なものへと変わった。

「痛つ…」

田景が…田向の髪を掴み、無理矢理自分へと顔を向けさせた。

「田向、返事は？」

「あ……う、お母……さん」

「ちよっとーあなた、何してるのよ……」

「……母親としての教育よ、口を挟まないで欲しいわね」

「なつ……」

宇佐の言葉にせん、田景はしつとしつ答えやがった。

田景は今もまだ田向の髪を掴み、引き上げ、離さない。

『うけけけけけッ！虐待だ虐待！ダメスティック、ヴァイオレース
！…』

天鬼がそれに合わせたようにゲタゲタと笑い転げる。

状況は最悪だつた。

ルールの情報交換なんて騒ぎじゃなく、誰もがその目的を忘れていた。

いや……ただ一人。

織笠 未娘は顔色一つ変えず、動き出した。

「…織笠？」

織笠はすぐに誹泉の所へ行き、何か耳元で囁く。

誹泉もそれに頷くと 。

ガアアアンッ

大広間のテーブルを激しく下から蹴つ飛ばした。

さすがにひっくり返る事は無かつたが誰もがその行動に動きを止め、部屋は静まり返る。

「さて…と」

そんな部屋の中、織笠は顔色も声色も変える事なく。

「榊さん、次のルールを」

榊さんにそう伝えた。

「あなた…私の話を「聞いてたわよ」」

織笠は田景の言葉に被せるようにし、答えた。

「…いい加減、無駄な討論は止めましょ」

織笠の言葉は現状に呆れた様子でもなく、ただ淡々としていた。

「…今詩織さんをこの大広間から外に出しても後から彼方が自分の

知つてゐる事を全部伝えるでしょ、逆でも同じ

確かにそうだ、詩織がルールを知る事が出来なくとも俺が後で伝えるだらうし日景の場合は日向が居る。

…無駄な討論つてのはわかつてゐたんだ。

「だつたら卑くルールを把握して、討論するならそれからでも遅くないでしょ、榎さん」

「あ…うん、そうだね」

一回目の呼びかけで榎さんも完全に我に返つたのか、頷くと自分の知るルールを伝えた。

【武・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。】

これは…、これが何を指しているのか、俺にはわかつた。

ナイフでリストカットした俺に配布されたのはナイフ。

そしてタバコ。

…もつとわかりやすい例として脇差しを持つたままの国崎も居る。

つまり経緯は不明だが国崎は脇差しで”自分を刺した”のだ。

…ちょっと待て。

ゾクリとした冷たい予感が俺の頭を靈める。

ナイフで自殺したならナイフ。

なら例えばロープとかでの首吊りならロープなのだろうか？

だったら…拳銃自殺なんかだと？

拳銃…そのものが配布されたり、するのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653y/>

リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

2011年11月26日21時49分発行